会いたい

ラサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
会いたい

【Ｎコード】
Ｎ９２９９Ｚ

【作者名】
ラサ

【あらすじ】
三年前、私は事故で突然恋人を亡くした。最近になって、その恋人が残した空き家に幽霊がでるという噂を聞き、行ってみるものの、幽霊など現れない。
ある日、再び空き家へと行った私はとうとう幽霊と遭遇する。
しかし、そこにいたのは……

1

住宅街の少し外れの古びた空き家に幽霊がでると噂されたのは、夏も終わりに近い頃だった。

「売っちゃいなさい。あんな家、住みもしない、貸しもしないなんて無駄じゃないか。

放っておくから、変な噂が立つんだよ。売っちゃえば、土地だけでもたいしたお金にもなるそうじゃないか」

ことあるごとにそう言っていた母は、ここぞとばかりにまくしたてた。

「何度いえばわかるのよ。あれはまだ私のものじゃないの。名義上預かってるだけなんだから売るつもりはないの。絶対、ないの」

言い返す私は、いつものことなのでほとんど投げ遣りになってしまっていた。

「だいたい、そんなもの預かってたって、あんなさびれた家、使えもしないよ」

「どうでもいいでしょ、そんなこと。例え形だけとはいえ私が預かってるんだから、私の自由よ」

人の噂もなんとやらと言うが、幽霊の噂はかなり広まっていて沈下する様子もなく、結構な問題となっていた。初めは、私もどうこうするつもりはなかったのだ。そんなもの、はなから信じてはいないし、大体が何かの見間違い、もしくは勘違いと相場が決まってい

るのだ。
しかし、新しく入った情報が、私の重い腰を上げさせた。
『空き家にでる幽霊は、若い男である』
家主代理の私はさっそく一人で空き家に出かけ、日暮から夜明けまで、そこで幽霊を待った。けれど、ただの一度も幽霊は私の前には現れなかった。
正直、私はがっかりした。
別に幽霊が好きだったからでも、若い男が好きだったからでもない。
ここにでるのなら透（とおる）の幽霊だと思ったからだ。
透は、私の恋人だった人。三年前、ひょっこり出かけたきり、戻らなかった。二十八にもなって定職にもつかず、根無草のように生きている人だった。放浪癖があるのは分かり切っていたので、いきなり彼がいなくなっても、私は別段心配しなかった。
だが、二週間を過ぎて、私は透の車がこの町から遠く離れた海に面した崖下から発見されたという連絡を、彼の顧問弁護士だった人から受けた。
かけつけた私が見たものは、これ以上なくひしゃげた車と、運転席のシートについた黒ずんだ血の後だけだ。
死体は波にさらわれたのか、とうとう見つからなかった。
透は、まるで自分が死ぬことを予期していたかのように遺言を残していた。他に身寄りのない透はあの家の名義と管理を――と言っても、遺産の方は透の放浪資金のため半分以上はなくなり、あとは自動的に弁護人を通じて家の管理費に使われて結局のところびた一文私にお金が入るわけではなかったが――私に譲渡するようにと。
あの事故から三年が過ぎようとしていた。私は二十五になっていた。
私はもう大学生じゃない。就職難の為一般の職種の就職試験にこ

とごとく落ち、教員免許を持っていたためにかろうじて地元の中学校の臨時講師として採用してもらい、社会人となっていた。透が決してならなかった普通の社会人に。

そうして、時間は流れていくのだ。

でも、私はまだどこかで透が生きているような気がしてた。いつか、なんでもなかったように私の前に、

「ただいま」

そう言って笑ってくれると、心の半分でだけ、信じていた。

2

「お、お見合い　っ！？」

事件は、母の持ってきた一枚の写真から始まった。

「ちょっと、お母さん、どういうことよ！？」

久々に家に帰った日のことだった。母は私が大学に入る少し前に再婚したので、私は今勤務している中学校の近くにアパートを借りていたのだ。

「いやね、なんでも、あんたのこの前撮った写真を見た友達のお姉さんが、何を思ったか気に入ってねぇ、息子もいい年頃だから、どうですかって。せっかく言ってくださるんだから、会うだけでも」

私はテーブルをたたいて立ち上がる。

「断ってよ、そんなの！　卑怯だわ、私の断りもなく、勝手に話を進めて！　私、お見合いなんかしないからね。絶対しないわよ！！」

私は居間を出て、玄関へ向かった。

「ど、どこいくんだい？」

「決まってるわ。帰るのよ、自分のアパートへ！」

久しぶりに家に帰ったと思ったらこれだ。母はいつだって自分で何でも勝手に決めて、私には事後承諾なのだ。再婚のことだってそ

うだった。
もちろん、母だってひとりの人間だ。幸せになりたいと思うのは、当たり前のことだ。それを、娘だからといって私が邪魔できるわけもない。
でも、それと同じように私の幸せは私にしか決められない。誰にも、決められないのだ。
それが何故、この人にはわからないのだろう。

「もう、三年も経ったんだよ。忘れなさい、あの人のことは」

靴を履き終えた時、背後で、残酷な声がした。
私は振り返らなかった。

「死んでしまった人を、いつまでも思ってたって仕方ないんだよ。あんたは、生きてるんだから。これから先、独りで生きていくなんてことできっこないんだから」

さもわかりきったように言いきる母の傲慢さに腹が立った。
確かに、母はそうだろう。
でも私は違う。私は母ではないもの。全てを同じに考えるなんてできっこない。
それなのに何故、自分の考えだけが絶対のように、自分だけが正しいように、言い切れるのだろう。
私でもないのに。私の気持ちなんて、全然わかろうとしないくせに。

「おまえのためを思って、言ってるんだよ」

嘘つき。
私のために、そう言う？

それなら、私の気持ちなんてどうでもいいの？
こんなにあなたの言葉で傷ついているのに、それでも私のためだというの！？
そう叫びたかった。
三年も。
あなたはそう言うけれど。
まだ三年よ。私がこれから生きていく長い人生の中で、まだ、たった三年だ。
私のためを思って？
そう言えば、自分が正しいとでも思っているのだろうか？
免罪符のような言葉を掲げて、私の心を踏みつける。
そんな独り善がりな思いやりが、どれほど私を傷つけてきたか、そんなこと思いもしないのだ。
いつだって、私のことなんて考えてはいないくせにこの人は優しい母親のふりをする。
私を本当にわかってくれたのは、透だけだった。透しか、いなかった。
透がいればよかった。
透だけでよかったのに、いつも私にはいらない人ばかり残る。

「――」

私は黙っていた。
大声で心の中に芽生えたやりきれなさを叫びたかった。でも、できなかった。
叫ぶ前に泣いてしまう。泣き顔だけは、見せたくなかった。
私は黙って家を出た。
どこか、一人になれるところへ行かなければ。
けれど、この密集した住宅街ではそれは望めない。こうしていても、どこかしらに人がいる。

私は唇を噛みしめ、ついでに自分の手の甲をつねりながら、北へと向かった。

住宅街を外れた空き家。

あそこへ行こう。

あそこなら、誰も滅多に入って来るまい。

あの噂が出始めた時は、野次馬根性で来てた人はいるだろうけど、昼日中に幽霊を見にくる物好きはいないだろう。

あそこなら、きっと思いきり泣いても構わない。

透がいた、あの場所でなら――

3

「きゃ――――――っ！！」

とうとう堪えきれずに泣きながら薄の生えた原っぱを通り抜ける頃、凄まじい金切り声が５０ｍほど先の塀の中から聞こえてきた。

あの空き家だ！！

私はすぐに門へと急いだ。五、六人の制服を来た高校生の女の子たちが中から飛びだしてきた。

「どうしたの！？」

私はその子達にかけよった。泣いている子もいる。

「でででたのっ！！　お、おばけよ！！」

一人が叫んだ。

「どこに！？」

やっとでたのだ！

「に、二階の奥！！」

それだけ言うと、彼女らは一目散に逃げていった。

どうやら遊び半分で来たらしい。そこで本物を見つけて、予想外の出来事に慌てたというわけか。

でも、あんな関係もない子供の前に現れて、なぜ私の前には出てこないのだ。あの薄情者は！？
憤りを感じつつも、私は中へと入る。
土足のまま階段を上って、開いたままの奥の部屋へと駆け込んだ。
この部屋は、透の部屋だったのだ。

「とおる！！」

確信を持って、私は叫んでいた。そして懐かしい姿を探した。
だが、まっすぐに私の視界に飛び込んできたのは。

「――？」

透とはまったく違う、黒ずくめで長身の、本当に若い幽霊だったのだ――

4

一瞬私は別の、どこか知らない空間に入りこんだような気がした。
強い、何か引きつけるような視えない力があった。
そしてその中心に、彼はいた。

「――」

後ろの壁をかすかに透かして、私をじっと見ていた。
テレビで見るのと違って、その幽霊は透けてはいるけれど、ちゃんと全身があった。
優しそうな顔。
襟足の少しのびた髪。
見たこともない、知らない幽霊。

「ちがう……とおるじゃない……」

それまで歓喜に輝いていたと思われる私の顔は、幽霊が哀しげになるくらい急激に、落胆の表情に変わっていった。

「……」

私は、ひどくがっかりしていたので、この場の異常な現象を気にも止めなかった。
絶対に、透だと思ったのだ。

根拠のない分、思い込みは激しくて、私は本当に久しぶりにがっかりした気分を味わっていた。
しばらくその場に立ち尽くし、そうして、どれほどの時間が過ぎたのか。
不意に顔を上げると、幽霊はまだそこに立っていた。
長身で黒ずくめの幽霊はひどくすまなそうな表情になったまま佇んで、私を見つめている。
そして、ぺこんと頭を下げた。

「――」

それが何だかおかしくて、私は笑ってしまった。
幽霊の顔にも、安堵の表情が浮かぶ。
その時の私は、彼を幽霊だと頭では理解していたが、本当にはわかっていなかったような気がする。

「ごめんなさい。あなたのせいじゃないの。ただ、勝手にかんちがいしてただけ。気にしないでね」

私が笑うと、幽霊も笑った。
とても変な幽霊だ、ちっとも恐くない。
恐そうな顔もしていないし、体には血もついていない。
透けて後ろの壁が映っていなかったら、とても幽霊とは思えない。
しかも私に頭を下げた。絶対に変わってる。

「あなた、どこから来たの？　どうしてここにいるの？　昔、ここに住んでた人？」

私が言うと、幽霊は困ったような顔をした。
唇が何かを語って動いた。

けれど、私には聞こえなかった。

「何？　もっと大きな声で言って。全然聞こえないわ」

もう一度、幽霊は言ったが、やっぱり私には聞こえなかった。

「私の声、聞こえてる？」

幽霊は首を傾げて私を見ていた。

聞こえないのだ。

私が幽霊の声を聞けないように、彼にも私の声は聞こえないらしい。

これでは会話になりはしない。

そして、はたと気づく。

もし私が透の幽霊に会えても、私達は言葉を交わすことすらできないのだ。

こんなに待って、その挙げ句に、こんな致命的な事実を知るなんて！！

なんだか、唐突に私は虚しくなった。そして、腹が立った。

「――かえる」

私は言い捨てて、その場を走り去った。

幽霊は追いかけてきたりはしなかった。

門も開け放して、私は走った。

そうして薄野原を通ると、また、哀しくなってきてしまった。

「――」

その場にしゃがみこんで、私は息を整える。
どうしてだろう。この頃は、哀しいことばかり起きる。
期待しすぎるから、いけないのだろうか。
私はただ、はっきりした答えがほしかったのだ。
中途半端な状態に、透が私をおいていってしまってから。
三年前の私は、こんな風になるなんて、思ってもいなかった。
透がいて、私の傍にいて、二人でいろんなことをして。
それがずっと続くものだと思っていた。
やがて私達は結婚して、子供が生まれて、二人で年を取って――
そんな風に、生きられると思っていた。
そう、信じていた。

「とおる……」

私は、こんな風に終わりたくはなかった。
終わりたくはなかったのだ――

5

日曜の午後、買い物を終えてアパートまでの道程を運転中、私はふと、昨日空き家の門を開け放したまま帰ってきたことに気づいた。
あの時はわかっていたけれど閉めて帰る心の余裕がなくて、そのままにしてきてしまったが、一日して冷静になって考えると、非常に心配になってきた。
泥棒が入っているんじゃないか――何もない空き家に、泥棒が入るわけもないのだが――、子供達が入ってきて悪さをしているんじゃないか、など、悪い方へばかり考えがいってしまう。

「――」

三秒考えてからハンドルを大きく切って方向転換し、私はまた空き家へ向かった。

そういえば、あの幽霊はまだいるのだろうか。

思い返して、私は少し笑ってしまった。
あれはなかなか変な幽霊だった。
生きているみたいに反応する。あの透け透けの体で。
言葉が通じるなら、霊界に透がいるのかどうかでも聞けたのに。

「あ――」

文房具店の看板を前方に確認した時、私はあることを考えついた。

「――まだ、いるかな」

何故かわけのわからない予感を確信して、私は店の駐車場へと入った。

こうして冷静に見てみると、確かに空き家は幽霊の出そうな雰囲気をかもしだしていた。
私は門に下げてあった立入禁止の札を直してから中へと入る。
決して大きくはないが、しっかりとしたつくりの家。
がっちりとしたドア。
白くなった床。
差し込む日差しの中で、塵が舞っている。
遠くで聞こえる子供の声が、逆にここを隔てられた空間へと錯覚させた。
透はこの家を好きだと言っていた。
透がいた時から、この家にはほとんど家具を初めとする生活用品がなかった。
透が一人では多すぎるからと売ってしまったのだ。
そのお金は透の放浪資金に消え、だからこの家は、透がいても空き家と同じだった。
透は、物に執着しなかった。
何も持たない方がかえって多くを得るのだと、言っていた。
言葉通り、透はいつでも自由で、何にも持たずに全てを持っていた。
私はそんな透が好きだった。
羨ましかった。
透はいつだって、私とは違っていたから。

「――」

風がガラスを揺らす音が、私を正気に戻した。
見上げると、階段の踊り場の窓が枝とぶつかっていた。
階段を昇ると見える突き当たりの部屋が透の部屋だった。
やっぱりその部屋にも家具はなく、唯一透のお気にいりだったこげ茶色の木の揺り椅子とガラスのテーブルがあった。
昨日あの部屋に入った時は気づかなかったけれど、あそこにはまだあの椅子とテーブルが埃まみれの白い布を被ってあるはずだ。
目の前の扉の向こうに、前に見た光景が浮かぶ。
埃だらけの床に座り込んで本を読んでいた透は、今はもう過去のことなのだ。
私は、静かに扉を開けた。

「――」

予想通り、幽霊はやっぱりまだそこにいた。この前と同じに、そこに立っていた。
私を見て驚いたような顔をしていたが、やがてためらいがちに笑った。

「こんにちは」

私も笑った。
私は持っていたバッグの中から、お店で買った大きなスケッチブックとマジックペンを取り出した。　そして太いマジックで、こんにちは、と書いた。
それを見せると、幽霊は笑いながら頷いた。
我ながらうまい手だと、私は思った。
どちらも声が聞こえないのなら、視覚に訴えればいいのだ。
手話という手段もあったのだが、私はそれを知らないし、幽霊も

知っているとは思えなかったのでこれはやめた。

あなた名前は？　どこから来たの？

書いたものを見せると、幽霊は黙って首を振った。

わからないの？

また、幽霊は首を振った。

私を見つめる瞳は、困ったような、子供を諭すような、穏やかなものだった。

「――」

私は、それ以上、この質問を聞いてはいけないのだと悟り、だが彼に対する興味は尽きずに、新しい質問を紙に書き込んだ。

ここで　何をしているの？

透けた腕が突然動いたので、私は内心びっくりした。

幽霊の腕は真っすぐに伸ばされ、扉を指差していた。

「何？」

幽霊は、遠い瞳をして扉の向こうを見つめていた。

哀しそうに、見えた。

誰かを待っているの？

彼が頷く。

恋人？

恋人という文字に、幽霊は笑みを浮かべてもう一度強く頷いた。とても、愛しげに。

その人も幽霊？

驚くべきことに、幽霊は首を横に振った。

「生きてる人！？」

私は思わず言葉にしていた。

聞こえなくても、私が何を言ったのかはこの反応でわかったのだろう。頷いて笑う。

来てくれるの？

確信を持って、幽霊は強く頷いた。

「――同じなのね」

幽霊は首を傾げる。

「同じ。私も。同じ」

ゆっくり、私は言った。

「わかる？　私も、同じ」

今度は幽霊が、びっくりした顔をした。

お　な　じ？

唇が、聞き返す。

「そうよ。同じ」

私も　待ってるの

私が紙に書くと、幽霊は、また、唇を動かした。

「何？」

だ　れ？　　こ　い　び　と？

短く、ゆっくり唇は動くので、多少透けてはいるが、何を言いたいのかはわかった。

「そう。私も、あなたと同じ。ずっと、待っているの――」

今度は、私が頷いた。

そうして、私は透のことを、書いた。

ゆっくりと、少しずつ、大切な想い出を、私は幽霊に長い時間をかけて語った。

幽霊は、もちろん黙って聞いていた。時折楽しげに、時折切なげに、時折哀しげに、頷いて聞いていた。

私は嬉しかった。

長い間、私は透のことを誰とも話していなかった。

楽しかったことだけが、鮮明に想い出される。

想い出す透の顔は、いつも穏やかに笑っていて、それだけで私を幸せにした。

窓から差し込む赤紫が日の傾きを教えるまで、私と幽霊は無言の会話を続けていた。

風が窓を揺らして、別れを催促しているようだった。

もう　帰らなくちゃ

紙に書くと、幽霊は頷いた。

少し哀しそうに笑っていた。このまま帰るのが気が退けるほど。

「また、来てもいい？」

私は紙を見せながら、ためらいがちに言った。

幽霊は一瞬驚いた顔をして、それから、人懐っこい笑みを浮かべた。

唇が動く。

「――」

き　て　　ま　た　き　て

私は、すごく嬉しかった。

「また、来る。必ず。来るわ」

私が手を振ると、幽霊もひらひらと手を振った。

嬉しそうに笑ってくれた。

さ　よ　な　ら

「さよなら」

私は上機嫌だった。

私は、新しい友達ができた。しかも、彼は幽霊なのだ。

幽霊らしくない、けれど、本物の幽霊。

こうして、私と幽霊の奇妙な交流が始まったのである――

6

「とおるはね、いろんな所を旅するのが好きだった。出かけると、二週間以上は、確実に帰ってこないの。でも、帰ってくると、一番初めに、私に「ただいま」を言いに来てくれるの。たくさんのお土産話を、聞いたわ。不思議な話も。

前にも言ったとおり、とおるの両親は結構なお金持ちな上に、すごい保険金をかけて亡くなってしまったから、とおるは、いきなりものすごいお金持ちになってしまったのよ。

それで、どうしてあちこちを放浪するようになったかっていうと、ご両親が死んでしまった時、こう思ったんですって。こんなにあっさり、人間なんて死ぬから自分もいつ死ぬかわからない。多分、自分は長生きできそうなタイプじゃないから、この金を使って、自分のしたいこととして暮らそうって。

すっごくふざけてるの。

地道に働いてる人に、失礼じゃないねぇ」

私は話しながら、ペンを使って幽霊と紙での会話を繰り返していた。

幽霊は、笑いながら私の言葉を見ている。別に話さなくてもいいのだけれど、彼にはどうせ聞こえないのだからと、私は好き勝手に話していた。聞いていなくても、相手が見えている分、誰かに話しているのだと思えて、気が楽だったのだ。

私はもともと思ったことをそのまま話せるタイプではなかったから、ストレスを蓄めやすいというところもあった。

何でも話せる、といった友達は少なく、あたりさわりなく何でもこなしていたから、私が悩んでいるなどと、気づいていない人達も多いと思う。

ぎりぎりまで我慢するのは悪い癖だと、透はいつも言っていた。
透はものごとの本質を捉えるのに敏感で、いつも私が考えること、感じていることを先に知ってしまっていた。だから、私は透を初めはひどく胡散臭い奴だと、けむたがっていたのである。

何でもお兄さんに話しなさい。どんなくだらない愚痴だって、誰かに話してしまえばすっきりするから

冗談混じりの声を、まだ憶えている。
透はいつも半分ふざけてた。会ったばかりの頃は、そんな透のちゃらんぽらんな態度にいつも腹を立てていたものだった。
けれど、言葉の中にはいつも真実しか入っていなかった。
そう。
透は、いつでも本当のことしか、言わなかった――

「ひゃあっ！！」

いきなり目の前で透けた手が振られて、私は情けない声をあげた。
顔を上げると、幽霊は心配そうな顔でこちらを見ていた。
私の手が、いつのまにか止まって何も書かなくなったので、おかしいとでも思ったのだろうか。

「――ああ、ごめんね。ちょっと考えごと。どこまで話したっけ」

私はまた、言いながら書いた。
幽霊は、私の話を飽きる様子も見せずに、それどころか、本当に嬉しそうに聞いてくれていた。
幽霊が自分のことを話せない分、私はたくさん透のことを話した。
私が時々幽霊の恋人のことを選択式で質問すると、彼は上機嫌で答える。そんな私達の会話は普通とは全然違っていたけれど、温かな

ものだった。
私達は外界とは全く離れた空間にいるように、互いの恋人のことだけを話し合った。
彼の恋人は長い髪でとても綺麗な少女だという。
私はその娘に会って見たかった。会えたら、私達はきっと気が合うと思った。
穏やかな余韻だけを残す会話が、私に懐かしい既視感を呼び起こしていく。
それは透と過ごした日々に、私が失くしてしまったあの日々に、ひどく似ていた。だから、永い時が流れたような錯覚に、私は陥っていた。
幽霊と私は、まるでずっと前からの友人のように思えるほど自然に互いを受け入れた。あまりに自然すぎたことが、私には気がかりだった。
やがて来る別れを知っていたから、恐かった。誰かに依存しては生きられないと、私はもう気づいていたから。

「――」

幽霊は窓の外を見ていた。近づくと、彼の体を通して外が見える。けれど彼はまるで生きていた時のように横に避けて、私に場所を空けてくれた。

「――ありがとう」

その当たり前のような行動が、嬉しくて哀しかった。
彼はもう死んでいるのだ。
二十八で死んだ透よりも若い。まだ二十年すら生きていないのに、こんなに生きているみたいなのに、それでも彼はもう私と同じではない。隔てられた壁は、なんて大きいのだろう。

私は彼の声を聞くことさえできない。
「あなた、どうして死んだの？　まさか自殺？」
彼は慌てて首を振る。
だ　め　だ　め
「だめ？　何が？　自殺が？」
そ　う　だ　め
力強く、彼は頷いた。
恐い顔をして私を見ている。
「大丈夫よ、私はそんなことしないから」
そんな勇気など、ありはしない。あったら、とっくの昔に私は死んでいたはずだ。
私は椅子に腰掛けて、しばらく体を揺らしていた。
「死んだ人は、どこにいくのかしら。
透は、今どこにいるのかしら」
窓の外に目をやった。
秋の風が吹いてくる。
少し肌寒い風は、不意に私を現実に引き戻す。
遠くで聞こえる車の音。
子供達の声。
変わらない現実。

いつも通りの毎日。
透のいない、透だけがいない日常。
いつしか私も、それに慣れてしまった。あんなに好きだったのに。
時間は残酷すぎる。
想い出も感情も意味を失くして、還れない心は行き場がないまま、それでも残った。

誰もが、永遠に一人だから。

そんな言葉が痛いほど胸に刺さる。
それは真実なのだ。だから痛みも、いつか癒える。
あなたなしでは生きられない——言葉にするのはたやすいだろう。
けれど、ただ一人で生まれたように、死ぬときもやはり一人だ。
透がそうだったように。
生も死も、結局はただ一人のもの。
共有は決してありえない。どんなに望んでも。

「どうして、こんなことになっちゃったのかしらね」

私は、たくさんのことを考えてしまった。誰も考えなくていいこと、考えなくても生きていけること、そんなことを、透の死は私に考えさせた。
私は疲れていた。
考えることは嫌だった。
でも、私は気づいてしまった。気づいてしまったから、もう戻れない。
純粋に、打算も何もなく誰かを好きでいること、誰かとともに生きていくこと、考えないことは、もう永遠にできない。

あなたがいない。

あなたがいない。

それだけで、世界はこんなに変わってしまった。

「――」

椅子を立って、私は窓を閉じた。

きつく目を閉じて、それから振り返り、私は視界に幽霊を入れた。

ぼんやりとしていた私を、彼は不思議そうな顔をして立って見ていた。

いつかは彼もいってしまうのだろう。

私達は永遠ではないから、いつかは別れる。

そうしてまた私だけが残るのだ。たった一人で。

でも、それでも。

「――あなたが、いるわ」

私は笑った。そうしていないと泣いてしまいそうだった。

「今は、あなたがいる。今だけは一人じゃない。それが私の現実。

それだけでいい――」

な　に？

彼に私の言葉はわからなかったらしい。

私は黙って首を振る。そして、ゆっくり繰り返した。

「いいのよ。それで、いいの」

わけもわからず、幽霊は曖昧に微笑んだ。

私も、彼に笑い返す。

「それで、いいのよ……」

7

その日の夜に、携帯に電話がかかってきた。母からだった。

「何？　明日も早いから、寝たいんだけど」

今月の母の声は、私にとってあまりありがたくない。

いつも気まずい余韻しか残さないから、私はわざと不機嫌そうに言った。

『今度の日曜日、予定はあるのかい』

「？　別に、ないけど、何なの？」

『お見合いが、決まったんだよ。今度の日曜、十一時から、駅前のホテルで』

一瞬、頭の中がからっぽになった。

『ね、いいかい。土曜は家に帰っておいで。美容院は予約しといたから』

「ちょっ、と！　私断ったじゃない、どうしていきなりそんなこと！」

『ちゃんと、私も断ったんだよ。でも、あちらさんが会うだけでもって。そうまで言われちゃ、お断わりできないじゃないか』

当たり前のような口調に、怒りがわいた。

「それはそっちの都合でしょ！？　私がしないって言ってるのに、どうして勝手にそんなこと決めるのよ！！」

『あのねぇ、なにもこの人と結婚しろって言ってるんじゃないんだよ。一度断ったけど、向こうがどうしてもって、友達に言ってきたんだよ。こんなに言ってくださるのを、無下には断れないんだよ。おまえも、もう大人なんだからわかっているんだろ』

大人？

大人って何よ。

したくないことをして、言いたいことを言わないで、まわりに気ばっかり使って、それが大人なの。

そんなものが大人だって言うの！？

『会うだけでいいんだよ。そうすれば、それからお断わりすればいいから』

「――」

怒りで、言葉が出ない。

涙がこぼれそうになる。これは哀しいから？

哀しい時は、そう言わなきゃわからないよ。いつまでも、気づいてくれるのを待ってちゃ駄目だ。待ち続けて、お婆さんになったらどうする？　悔しいだろ？

そう言った透の声を思い出す。

でも私は今でもあの時のまま、何も変われない。変わることを恐

れたまま、動けない。
だって、透。あなたがいない。
私は、あなたの前なら素直になれた。あなただけが私をわかってくれたから、あなたの前では私はわがままになれた。
あなたの前でなら、私は私でいられたのに――

『いいね。とにかく、会うだけ会ってみなさい。会って気にいらないんだったら、断ればいいだろ』

「――」

嫌だった。どうしても嫌だった。けれど。

「わかった……」

そうとしか、私には言えなかった。
通話が切れた後も、私はしばらく携帯を耳にあてたままその場に座り込んでいた。

透。あなたがいなくなってから、私はどんどん嫌な女になっていく。

言いたいことすら言えない。
心の中で燻るだけの感情を持て余したまま、私はどんどん醜くなっていく。

だって透、あなたがいない。
あなたが、いない。

人には些細なことかもしれない。でも、私にとって、あなたがどんなに大切だったか。
知っていたくせに、もうあなたは帰ってこない。そして私は新しい人を選ばなければならない。

この薄情者。
あなたのせいよ。

8

お見合いの当日は、もう秋だというのに泣きたくなるくらいいい天気だった。

朝早くから、私は美容院へ行かされて、仰々しく着物まで着せられてしまった。

まるで成人式のようだ。

母もとっておきのいい着物を着てめかし込んでいる。

「いいかい、そんなふてくされた顔して相手の方に気を使わせるようなことするんじゃないよ」

だったら自分が見合いすればいいのに。

「――」

タクシーの中で、私はずっと無言だった。ぶっさい奴だったらその場で席を立ってやろうと決心しながら。

が。

予想に反して、お見合いの相手は、すこぶる好青年だった。

「こちらが高木勇介さん」

「――はじめまして」

私はしばし唖然としていて、自分が紹介されたことにも気がつかなかった。

すごいハンサム、というわけではなかったが、爽やかな感じで並

の上ぐらいだ。
笑った顔は優しそうで、実際の年令よりも若々しく見える。
そんな人が、なんで見るからに並がいいとこの私とお見合いする気になったのだろうか。
もしかしたら、渡った写真は、私にしてはめずらしく写りが良かったのかもしれない。

「じゃ、ここは当人同士で落ち着いてお話でも」

「そうですわね。私達お邪魔虫は少し退散しときましょう」

唖然としているうちに、話はそこまでいっていて、私達はいきなり二人きりになってしまった。
少してれたように、高木さんは笑って頭をかいた。

「――気を使っているのが、見え見えの手ですね」

その笑みが何とも爽やかなものだったので私も自然に笑い返した。

「でも、テレビなんかじゃいつもそうですよ。これが当たり前ってところですか」

他愛のないおしゃべり。

幽霊以外と、こんなにたくさん話したのは久しぶりだった。
趣味や特技にはじまる自己紹介を終えて、私と高木さんはたくさんの話をした。本当にたくさんの話を。
会話がつまらなかったのではない。
高木さんの研修時の失敗談やら怪奇談やら、会話はおもしろいものばかりだった。

「――じゃ、じゃあ、高木さんも、見たんですか？」

「まあ、それらしいのは、何度か。その時はさすがに、独りで夜中にトイレに行く気にはなりませんでしたね。とにかく考えないようにしました。あれは気のせいだ、気のせいだって自分に言い聞かせて。今でも霊安室の近くは、昼でも走って通り抜けます」

「でしょうね」

高木さんの話し方は気さくなもので、かといって馴々しい感じもなく馴染みやすいものだった。話題が途切れて気まずくなることもなく、私も気楽に色々なことを聞いたり、本当に楽しかった。

楽しいと、思っていた。

「こうして聞いてみると、やっぱりお医者様って大変なんですね。私には絶対無理です。根気とか、根性とか、ないから」

「確かに我慢強いのには自信ありますよ。でも、そのせいか、あんまりいいことないですね。暇もないし」

高木さんは優しい。透と同じように。

高木さんはいい人だ。透とは違うけれど。

私は久々に生きている人と楽しく過ごしていた。でも。

それなのに何故、私は今すぐにでも帰りたいと思っているのだろうか。

こんなに楽しいはずなのに、何故私はこの人を透と比べて見ているのだろうか。

視界の隅の壁掛時計の針が、やけに速く動いている――

「――」

徐々に会話から遠ざかっていく、別の意識がある。
どちらも自分でありながら、意識は二つに別れているような。
一つは現実に、一つは夢の中を漂っていた。
落ちていくように私の意識は鈍くなり、不意に透の声が聞こえてくる。

しっかり現実を捉えなさい。でないと、あとでしっぺ返しがくるよ。思い込みだけで、願いは叶わないんだからな

ああ、透。
現実って何？
こうしてお見合いして、もしかしたらそのまま結婚して、子供を産んで、そうして年をとっていくってことなの？
そんなのずるい。
あなたは自由に生きてたくせに。私がそうして生きちゃいけないわけは何なの。
あなたはいいわ。そうして好き勝手に生きれて、好き勝手にどこへでも行けて、好き勝手に死んでしまって。
でも、私は生きているのよ。これからも生きていかなければならないの。
どうして私だけが我慢しなければならないの。
私はあなたが好きだった。とても、とても、好きだった。
なのにどうして、あなた以外の人を好きになって、結婚しなくちゃいけないの。
何故、私はあなたのように好き勝手に生きられないの。
大事なことは行動すること。何もしないでジジいババあになって

から、ああ、あの時こうしていれば、なんて思わないようにね

だってあなたを縛るものは何もなかった。
あなたはいつだって自由だった。
私は違う。
家族と常識に縛られて、私は身動きがとれない。
常識。それがなんだというの。
ううん、腹立たしいのは、結局そこからはみだせない自分。
人の目を恐れて、ひっそりと暮らしていこうとするただの臆病者。
私には、あなたのようには生きられない。
その勇気がない。そうして生きていける、力すらない。
今の自分はとても惨めだわ。
私もあなたのように生きたかった。
あなたのように何にも縛られずに、常識にも世間の目にも左右されずに、そんな風に生きたかった。あなたと二人なら、できると思った。

あなたが、いれば――

体がひどく揺れているのではないかと思いかけた時、がたん、と椅子を引く音がして、高木さんが私の肩を支えるように掴んだ。

「顔色、悪いですよ。具合が悪いんじゃないですか？」

居眠りをしかけて、はっと我に返ったような感覚だった。
その時初めて、私は自分の体調がおかしいことに気がついた。

「あ――」

頭に錘でも入ったような、支えていなければそのまま床に落ちて

しまいそうな感覚。
同時に襲ってくる嘔吐感。
涙が滲んた。
「――すみません、気分が、悪くて……」
私はテーブルに手を置いて体を支えた。
「お母さん、お呼びしましょうか？」
「いえ、いいです。少し休めばよくなると思いますから――」
「でも、本当に、顔色悪いですよ」
高木さんは私の顔を覗きこんで、しばらく考えこむように眉をしかめていた。
「高木さん――？」
「家に、帰って下さい」
その言葉に、私は呆気にとられた。
「――な、何言ってるんです！？　お見合いの相手を放って帰るなんて、そんな失礼なことできません！！」
「いいえ」
高木さんは断固とした態度で首を振る。

「――そんな今にも倒れそうな顔色で、無理して相手をしてもらう方が失礼です」

「！！」

「医者の言うことは聞いてください。帰って十分な睡眠をとること。昨夜、あんまり寝てないんじゃないですか？」

「――」

私の反応を見て、高木さんが笑った。

「さぁ、出ましょう。しばらくしてから、あなたのお母さんには言っておきますから」

「……高木さん」

高木さんは私をホテルのロビーへ連れていって、そこでタクシーを頼んだ。

「座ってください。すぐにタクシー、来ますから」

「――すみません、本当にすみません」

「いえ、謝らなければならないのは、こちらのほうだと思っていますから」

「え？」

高木さんはためらいがちに眼をそらして、

「実は、このお見合い、無理に仕組んでもらったのは俺なんです。すみません」

いきなり頭を下げた。

「あなたの、恋人だった方のことも、聞いてました」

「！？」

「――とても、哀しいことだったと、思います」

「……知ってて、どうして？」

高木さんは、和らかな眼差しで私を見返した。まるで透のように。

「――俺にも、好きな娘がいました。高校の時ですけど。いいなって感じだけの人でしたけど、なんでか今まで忘れられなかったんです。

今にして思えば、何もしなかったから、忘れられなかったと思うんです。

何もしなかったから、かえって考えます。あの時うちあけていたら、もしかしたら、何か変わっていたかもしれないって」

「――」

「ずっと、それがひっかかってて、そんな時あなたの写真見せられて――あ、でも、似てるとか代わりとかじゃなく、ほんとに一目でいいなって思ったんです。だから、今度は後悔したくなかったんです」

「高木さん――」

私には、返す言葉がなかった。

ボーイさんが私達に近づいて来て、タクシーが来たのを報せてくれた。

私は高木さんに支えられて外へ向かった。

入口の自動ドアの向こうに、タクシーが見えた。

「ありがとうございます。本当にすみませんでした」

私はもう一度深々と頭を下げた。

「いいえ。もとは俺が無理言ったからです。あなたが謝ることはありません」

高木さんが笑う。

「俺、後悔してたんです。何も言わなかったこと。もっと前に何か、何でもいいから行動してたらよかった。ずっとそう思ってたから、今からでもなんかしようと思ったんです。人生一度しかないから、後悔しないようにって」

「――高木さん」

「すぐに忘れられるとは、俺も、思ってません。とても簡単には忘れられないこともわかってます。だから、時間をかけてつきあっていけたらと思うんです」

私はなんだか情けなくなった。しなければよかった、お見合いな

んて。
高木さんはいい人だ。とってもとっても、いい人なのに。私はこの人を傷つける言葉しか言えない。
「――返事は今でなくてもいいです。また、連絡します」
鈍い痛みを抱えたまま、私はタクシーに乗り込んだ。
「――ごめんなさい。ごめんなさい」
私はそれしか言えなかった。
「帰ってすぐに薬飲んで寝たほうがいいですよ。あ、御飯はちゃんと食べてください。食べないと体力なくなりますから」
ドアが閉まる。
高木さんはタクシーが角を曲がって見えなくなるまで、そこに立って手を振っていてくれた。私は体を後ろへ向けたまま、ずっとそれを見ていた。
長年の目標を達成したような、そんな晴れ晴れした顔を、高木さんはしていた。それに比べて、私はなんて惨めな、情けない顔をしているのだろうか。
しばらくしてから、私は向き直り、そのまま黙っていた。
「――」
流れる景色に眼がついていかない。
私は眼を閉じた。
何も考えたくない。このまま眠ってしまいたかった。こんな気分は、前にも感じたことがある――あれは、透が死んでしまったと聞

かされたあの時に似ている。
考えてはいけない。
何も考えてはいけない。思い出したくないことばかり、考えてしまいそう。
考えてはいけない。
何も、何も――

「着きましたよ」

不意にかかる言葉。

「！？」

目を開けると同時に車が止まった。
見慣れた風景。
実家の前だった。

「すみません」

反射的に、私は言っていた。
たぶんこんな時に、独りでいたくなかったからだろう。

「この先、もう少し行ってください」

そうして空き家の少し手前で、私はタクシーを降りた。
着物なんか着て、こんなところまで来るなんて、馬鹿みたいだった。
でも、私はどうしても彼に会いたかった。
会うだけでいい。

何も話さなくても、ただ――

「――」

着物を乱さないように、しずしず歩きながら、私は中に入った。

会いたさに反比例するように、体はひどく鈍く動いていた。

9

彼は、私に気づくなり眼を丸くさせた。
確かに、こんなところにこんな格好で来るのは少々場違いだったと思う。
でも、彼の顔には嬉しいような表情が浮かんでいたので、私は気をよくしていた。

「どう、きれいでしょ？」

私はくるりと回って言った。
彼は感動したように何度も頷いた。
手もたたいてくれた。音はなかったけれど。

「今日ね、お見合いしてきたのよ。わかる？　お見合いよ、お、見、合、い」

目を丸くして彼が頷く。

「でね――」

続けようとして、不意に私は言葉をなくした。
大きく、息をついた。

「すごく、疲れちゃった　」

本当に、私は疲れていた。
重い荷物を背負いながら、ずっと歩かなければならないように、

本当に、とても疲れていたのだ。
幽霊は心配そうな顔を私に向けていた。
私は、気をとりなおすように笑った。

「その人ね、とてもいい人なの。今、研修医として大学病院に勤めてるんですって。
でも、高飛車な感じもなくて、優しくて、気を使ってくれて、透のことも知ってて、それでもいいからつきあってくださいって言ってくれたの。本当にいい人なの、もったいないくらい、いい人なの」

早口にまくしたてる。
すぐに全部吐き出してしまわないと、みっともなく泣いてしまいそうだった。
お見合いの席での高木さんの姿が思い出される。
でもその声も顔も、話し方も、もう虚ろだ。
高木さんは優しい。透と同じように。
高木さんはいい人だ。透とは違うけれど。

わかっている。わかっているのだ。

「でもね、その人がいい人な分、透と重ねて見ちゃうの。その人の仕草、言葉遣い、何をしても、同じだとか、ここは違うとか、そんなとこしか憶えてないの。どうしても、透と比べちゃうの――」

透の声。
笑った顔。
やんわりとした口調。
優しい性格。
癖も、仕草も、まだこんなに憶えてる。
なぜ、みんな忘れろというのだろう。

こんなに幸せな想い出なのに。
忘れてしまったら、私達のあの日々は、どこにいくというのか？
私が忘れてしまったら、それこそ意味のないものになってしまう。

確かに透は生きていたのに。
確かに、私達は愛しあっていたのに。

「ねぇ。死んだからって、どうして忘れなきゃいけないの……？」

忘れなければ生きていけないほど、私は弱い女ではないのに。
想い出だけを大事に抱えて、それだけで生きていけるのに。
そんなにいけないことなのだろうか。
一人で生きていけるのなら、それでいいはずなのに。
誰かがいないと生きていけないなんて、そんな弱い人間にはなりたくない。
私と透は、どんなに近くにいても、一人だった。それを互いが知っていたから、二人でいるのが好きだった。
二人でいても、どこまでも一人だったのを知っていたから、私は今も透なしで生きている。
みんな同じなのに。
どんなに深く愛したとしても、本当の意味で一緒には死ねない。
どんなに愛しても、結局は一人なのだ。
それは変えられない。

だからこそ、大事なのに。
だからこそ、愛しいのに。

それを抱えて生きて、何が悪いのだろう。

気がつくと、彼は目の前に来ていた。

「――」

私の前に立って、ためらいがちに手を伸ばして私の頭を撫でる動作をした。

感触のない、それは無意味な行動だったが、私の心を和ませるには充分だった。

「――」

彼には何も言わなくても私の哀しみがわかる。

私は、無意味なように思われる彼の行為の中の思いやりが嬉しかった。

私達の間に、余計な言葉はいらなかった。

言葉がなくても、私達には互いの気持ちがわかった。何故なら、どちらも、待ち続けるだけのものだから。

「ありがとう。ごめんなさい」

私は、ゆっくりそう言った。

幽霊は首を振る。

だ　い　じょ　う　ぶ？

唇が、そう告げた。

心配そうに私を見ている。

それだけが、今の私には救いなのだ。

待つだけの恋は、終われない恋は、どちらも同じだった。

哀しみよりも強く、想いはまだ心に残っている。
忘れることなどできなかった。
今までも、これからも。
ならば待ち続けなければならない。例えその日が二度と来なくても。

「大丈夫。大丈夫よ」

私は笑った。
泣かないためには笑うしかないことも、この一年で嫌というほどわかっていた。

10

午後近くに、携帯が鳴った。母からだと、私はひどく重く感じられる頭を一振りして、とった。

「もしもし…」

『あんた、どういうつもりなの！！』

きんきんした声が耳に刺さる。

『一人でとっとと帰るなんて、失礼にもほどがあるじゃないか！？』

うんざりした。

「――気分が悪くなったのよ」

『気分が悪いからってねえ！』

「帰って寝なさいって言ったのは向こうの方よ。お医者さんの言うことに逆らえるわけないじゃない」

不服そうなしばしの沈黙が、伝わる。

『――それで、どうだったんだい』

「は？」

『だから、高木さんだよ』
興味津々の声。
「――別に」
『別にって、それだけなのかい？』
「いい人だわ。それだけよ」
忘れていた感覚が戻ってくる。
嫌な気分。自己嫌悪だけが残る。
「お母さんが期待してることにはならないわよ。お断わりするんだから。じゃあね」
早口に言い捨てて、私は携帯を無造作においた。何か言っている声がかすかに聞こえたが、気に止めなかった。
考えてはいけない。
そう、自分に言い聞かせた。こんな嫌な感情は捨ててしまわなければ。
携帯が、鳴った。
「――」
また母からだろうか。
私は躊躇したが、携帯を手にとった。見知らぬ番号が映る。
誰からだろう。

「――はい」

だが携帯の向こうから聞こえた声は、私の予想外だった。

高木さんだった。

「た、高木さん？」

『お早ようございます。お加減はいかがですか』

明るい声が耳に届く。この人は、他人を安心させるような話し方をする。

「だいぶいいです。昨日は本当に失礼しました。ごめんなさい」

『いいえ。謝らないでください。そんなこと聞くために電話したんじゃないですから』

さらりとした口調は、私の気分を軽くした。この人は、いい人だ。

『突然ですけど、今度の日曜、お暇ですか』

「え？　あ、暇、ですけど」

『食事でもどうですか。ここで印象づけておかないと忘れられそうですから』

言い方に、私は笑ってしまった。

「そんなことないですよ」

『そうですか。俺、患者さんになかなか覚えてもらえないんですよ。印象薄いんじゃないかって悩んでます』

「本当に大丈夫ですよ。私、ちゃんと覚えてます。日曜日も、あなたの前通り過ぎたりしませんから安心してください」

『いいんですか』

「はい。何時ですか」

『じゃあ、１１時に車で迎えにいきます』

「はい」

受話器をおいた途端、容赦なく沈黙がおりてきて、私の心はまた沈みだした。

「――」

どうしてだろう。どうしてこんなに気分が晴れないんだろう。

「これで、いいのよね」

自信はなかった。

11

「おはようございます」

勤務している中学校の職員室に入るなり、同じ学年を組んでいる年上の教諭があわてたように近づいてきた。

「ちょっと、先生、こっちこっち」

席に着く前に、職員室横にある給湯室に連れて行かれる。

「どうしたんですか。そんなにあわてて」

「昨日、お見合いしてたでしょ。ホテルで」

声はひそめていたが、興奮を抑えきれない声音に、私は咄嗟に返す言葉をさがせなかった。

「あそこのレストランのランチに行ったら、先生着物着て男の人と一緒にいたからすぐわかったわよぉ」

狭い地域だ。何かあったら誰かにすぐ気づかれる。

内心の動揺を隠して私は笑った。

「やだ、見られちゃってたんですか。母親が会ってみろってうるさくて。今どきお見合いだなんて母親のレトロな感覚に付き合うのもつかれますよー」

「いいじゃないの。相手の人、チラッと見たけど、すごくいい人そうじゃない。何やってる人なのよ。教師にはいないタイプだったわね」

「なんと、お医者さんですよ、お医者さん」

「やだ、大当たりじゃない。あたしもお医者さんとコンパしたーい。今度頼んでみて」

「先生、旦那さんが聞いたらおこりますよ」

「そこは内緒よ」

そこで、チャイムが鳴る。

「おっと。教室行かないと。じゃ、また詳しい話聞かせてよ」

1年生の学級担任である数学教師の彼女は、職場ではいい先輩だ。専門職には何かとマニアックな人間が多く、正直、教師に向いていないと思われる人物も多くいる。地方であればあるほど、それは顕著だ。そんな中で、彼女は数少ない有能な教師だ。教え方もうまいし、丁寧だ。中学時代、この人に数学を習っていたら、ここまで数学に苦手意識をもたなかっただろうかと思う。

彼女と話すのは嫌いではない。

でも、よりにもよってなぜ、昨日の件を彼女に見られてしまったのだろう。

他にも誰かに見られたのだろうか。

ホテルだから、生徒に会うはずはないが、父兄がいたとしたら？

「――」

大きく息をつくと、私は職員室に戻った。職員朝会前のコーヒーの準備をするために。
憂鬱な1日の始まりだった。

放課後の合唱部の活動が終わり、生徒が音楽室からいなくなると、私は戸締りを確認するために音楽準備室に入った。3階の窓だから、もし鍵があいていても泥棒が入る心配はないが、習慣に従い、チェックする。
音楽室は生徒玄関の真上だ。外灯の明かりに照らされ、生徒たちが家路を急ぐのを眼下に、思わず笑みがもれた。
音楽専科の私には、現在の職場はとても居心地がいい。
中規模校のため、音楽教師は講師である私しかいないが、全学年の音楽を担当しても空き時間がかなりある。合唱部顧問も担当しているが、文科系の部活は数も所属する部員も少なく、合唱部もその例にもれず15人ほどの細々とした活動だった。

中学生の甲高い笑い声。
走るたびに学生かばんの中の道具がゆれてもらす、くぐもった音。
ばたばたと遠ざかる運動靴。
それらすべてが、異空間の出来事であるかのように感じられたからだ。

学校という空間は、ひどく特別だ。

大勢の人間がひしめき合っているのに、いなくなった途端の奇妙な余韻。
残像のように残る密やかな気配。
扉を隔てて、彼岸と此岸があるような。

その不可思議な静寂を私はとても好きだった。

「――」

何事もなく1日が過ぎたことに感謝した。朝はお見合いの件がみんなにばれていたらどうしようとひやひやしたが、あれからその話題は他の先生たちからも、勿論生徒たちからも出なかった。気にしすぎだったようだ。

生徒たちもみな帰ったようだ。生徒玄関はひっそりとしている。

私は準備室を出て、ピアノの周りを片付けた。

荷物を片付け、電気を消し、職員室へ向かう。

これが私の日常。

それ以上でも、それ以下でもない。

ありふれた、私の生活。

変わることなど、望んでいない。

12

そして日曜。
高木さんが私を連れていってくれたのは、駅前の通りを一つ外れた静かなレストランだった。
落ち着いた感じのいい店だと思った。
明るすぎない照明。
静かに流れるクラシック。
高木さんに合っている。

「すごく感じのいい店ですね」

「気に入っていただけてけて嬉しいです。前に一度連れてきてもらった時、俺も気に入って、また来たいと思ってたんです」

嬉しそうに高木さんは笑った。それを見て、私も笑った。
この人は、とてもいい人だ。素敵で、優しい。好きになったら、きっと幸せにしてくれるだろう。浮気もしそうにないし。
笑って話をしながら、私は心の中で高木さんを自分なりに分析していた。

「この間の、話なんですけど」

そう、高木さんが切りだしたのは、料理もすっかり食べ終え、食後のコーヒーをウェイターが運んでいった後だった。

「返事、聞かせてもらえますか」

この時が、来るとは思っていた。食事の後に、こんな風に切りだしたのは、もしかしたら高木さんも、この時を少しでも引き伸ばしたいと思っていたからではないだろうか。

「ごめんなさい」

言うべき言葉を、私は口にした。

嫌な気分だった。例えどんな理由であれ、誰かを傷つけるのは。

「高木さんは素敵な方です、私にはもったいない人です。でも、駄目なんです」

まるで小説のようなありきたりで陳腐な言葉しか、私は言えなかった。

「やっぱり、忘れられませんか」

高木さんの口調は、どこか納得したようなものだった。まるで初めからわかっていたように。

私は顔を上げた。

精一杯の好意を示してくれた人に対して私のできる、精一杯の礼儀だった。

「忘れられないと、思います。あの人がいなくなって三年、その間、私は大学を卒業し、社会人になりました。あの人がいなくても生きていけます。日常に追われて、あの人を忘れて、泣くことも毎日じゃない。仕事にも慣れました。生徒たちもかわいいし、忙しいけれどやりがいもあります。

今はこれで精一杯なんです。あの人がいなくても私は生きていけるけれど、あなたとお付き合いすれば、私また、あの人のこと思い

出して過ごすことになります。あなたとあの人を比べてしまうでしょう。あの人は、特別だったから――」

私が一番望んだ時に、あの人だけが私をわかってくれた。過ぎてしまったことでも、私には、大事な想い出だから。

「俺、我慢強いほうだから、いつまでも待ってます――って言っても駄目ですか？」

「――」

私は首を横に振る。それしかできなかった。

答えは、一番初めから決まっていたことだった。

「ごめんなさい――」

笑えなかった。でも、泣かなかった。

「いえ、いいんです。こうなるだろうってわかってましたから」

それでも変わらない高木さんの笑みは、私に締めつけられるような痛みを与える。

「どんな、人でした？」

何もなかったような、穏やかな問い。

「え？」

「――あなたの彼は、どんな人だったんですか？」

高木さんの言葉に、透の面影が浮かぶ。
私の思い起せる透はいつも笑っている。透はいつも、優しい感情しか見せてくれなかった。だからいなくなってさえ、こんなに優しく想い返せるのだ。
もしも、もっとどろどろした感情や、人間らしい怒りや、汚らしいところを見せてくれていたら、私は透を忘れられたかも知れない。
大人になって、綺麗ごとだけじゃない生き方を自分も学んだ。
それでも、付き合っていたころ、世間知らずな甘ったれの大学生の私から見ても、どこか浮世離れしていた透と同じような生き方をしている人を、私は見たことがない。そして、これからも見ることはないだろう。

「優しい、人でした――」

この三年、何度も思い返した懐かしい人。
私にとって、誰よりも大事な人。

「――いつも夢を見てるような、風みたいに自由な、一人でも生きていける、そんな奔放な、惹かれずにはいられない、そんな、人でした――」

そしてもう二度と、帰らない。
帰ってこないのに、何故私は待ち続けるのだろう。
こんなに素敵な人と新しい恋を始められないのだろう。

「――羨ましいですね……」

吐息のような、呟き。

「――」

椅子を引いて、高木さんは立ち上がった。

「すみません。しつこく誘って。俺、帰ります。送りもしない嫌な男だって、忘れてください」

何もなかったようにゆっくりと去っていく高木さんの背中を見て、不意に思った。

本当に、これでいいのだろうか。

その思いは、じわじわと私の中に広がり焦りと後悔に似た感情を沸き上がらせた。

今ここで、高木さんをつきはなして、それが、本当に正しいことなのだろうか。

私は、もしかしたらとり返しのつかないことをしようとしているのかもしれない。

「――」

それまでの決心は、容易に揺らいだ。

離れていく高木さんの姿。

どうすればいいのか、もうわからない。

透。透。教えて、どうすればいいの？

けれど透の声は、今は聞こえない。

私の問いに答えてくれる記憶の中の透の言葉は、何もなかった。

この感情はただの感傷に過ぎないのか、警告なのか。

本当ニ、コレデイイノ――？

「――」

だが結局、私は黙って見送ることしかできなかった。
それ以外の何が、私にできただろう。
さしのべてくれる手を払ったのは、私のほうなのだ。もういない温かな手を、忘れることもできないで。

目の前の空いた席。

二人のために用意された席に一人残る私は、ひどく淋しく見えるだろう。

「――」

ひどくやりきれない感情が、私の心を重くした。

13

案の定、一週間後の週末の朝早く、また母から電話がかかってきた。
勿論、見合いを断った件でだ。
きんきんした声がありったけの語彙で私を責める。
私は黙っていた。言うだけ言わせて諦めさせようと思っていた。
『よく考えてみなさい。あんたはまだ若いんだから、これから先独りなんてとんでもないことなんだよ。いかず後家だって人様に言われて生きてくのかい』
宥めるような声。
私が言いつけに従わないような時、母はいつも私をこんな風にじわじわと心理的に懐柔しようとする。
『女が一人で生きていくなんて、簡単にできるわけないだろう？年を取ってから、一人だったことを後悔するんだよ。そうなってからじゃ、遅いんだよ』
小さい頃は、そんな風に言われると本当に母の方が正しい気がして、結局言いつけに従ったものだった。
「――」
けれど、私はもう何も知らない、親だけが絶対で、正義で、真実だと信じていられるほどおめでたい子供ではなくなっていた。
偶像は当の昔に壊れ、私は親がただの、自分達と変わらない存在

なのだということに気づいてしまっていた。
あんなに揺らいだ心も、今は馬鹿らしく感じてしまう。
所詮は他人なのだ。
私が、私以外の何者にもなれないように、母が私を真に理解することはない。
母は一人では生きられない人だもの。
父親が死んで、一年たって、すぐに再婚した。
義父のおかげで、母は安定した生活を取り戻し、私は大学までいけた。
だから、そのことで母を責めたことはない。
そういう人なのだ。
それは哀しいことのようでいて、けれど、当たり前のことなのに――

「お母さんに、何がわかるって言うの――」

嫌悪すら覚える。

「誰にもわからないわ、私の気持ちなんて！　お母さんの思いやりは、私にはいつだって見当外れだもの！　一度だって、お母さんが本当に私のために何かしてくれたことがあるの！？　お母さんが大事にするのは、いつだって自分だけなのよ！！」

私は叫ぶように言って、通話を切った。
電源を落とし、バッグのポケットに押し込んだ。
やりきれない思いに、たまらなくなる。
私は深く呼吸を繰り返して、泣きたくなる感情を殺した。
こんなことでなんか泣きたくない。
母親の言葉に傷ついて泣くなんて。
泣くんだったら、もっと価値のあることのために泣きたい。

「――」

どうしていけないのだろう。
私は今でも、透が好きなのに。
何故、無理に好きでもない男と結婚させたがるのか。
透以外の人を好きになんてなれっこない。透は特別だったのだ。
だから、好きになったのだ。
誰にもわからない。もう、わかってもらおうとも、思えない。
私の想いは、いつだって透以外の人にはわからなかった。

「――」

私は哀しくなったので、また幽霊に会いに行くことにした。
彼に会えば、私の気持ちはいつも軽くなった。
穏やかに私を迎え、何も余計なことは言わない。言わなくても、
彼には私の気持ちがわかったし、私にも彼の気持ちがわかったから。
私は、言葉のいらない穏やかな沈黙が好きだった。透もそうだった。
だから私は、透と同じように幽霊が好きだった。
私の気持ちは、生きている人にはわからないのかもしれない。
なぜなら私ももう、死んでいるのと同じだから。
透が死んだと聞かされたあの日から、私ももう、死んでいるような気持ちだから。
だから、生きている人よりも幽霊といて、心が和むのかもしれない。
私はいつも、普通ではない誰かを愛している。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9299z/

会いたい

2011年12月29日16時49分発行